



2001 年度通常総会 開かれる



〈新役員の間々(前列右から 3 人目が大谷新理事長)〉

6月9日午後1時30分から、名古屋市東区のウィルあいちで「特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部」の2001年度通常総会が開催されました。正会員数79名中、書面出席を含め62名の方が出席されて、2000年度事業報告と決算の承認をいただきました。また2001年度の事業計画と予算の報告をさせていただきました。形式的な総会ではありましたが、

年に一度、元気な顔をみせていただけて、とても嬉しく思います。

総会后、理事会を開いて代表を互選したのですが、容赦なく私に大役が回ってきました。そんなわけで事務局や運営委員会のみなさんには、色々迷惑をかけながらの一年になることと思います。どうぞよろしくお願ひします。

私は水の都、大垣に在住しています。91年秋に「ウクライナの子ども達に日本の絵本を贈ろう」とみなさんに呼びかけて、全国からたくさんの絵本を贈っていただいたことがありました。あれから10年になります。チェル救の運営委員会の中でも、高齢化問題が出ていましたが、「これから何年かかわれるのだろうか」と最近ふと思います。

(大谷)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.com>

楽しんでもらえたでしょうか？ チェルQデー

「チェルQも法人となり、毎年総会を開かなくてはならない。でも総会自体は聞いていて楽しいものではないので(田中さんごめんなさい)、総会だけでは人は来ない」という危機感のもと、“一年に一度のイベントを開き、少しでも多くの方に来てもらおう。できれば会員でない人にも来てほしい。そのためには何をしたらいいのか”と考えて企画したのが、



今回のチェルQデー。総会後は『チェルノブイリから 15 年／見て聞いて、汗を流したボランティア』と題し、あれこれと盛りだくさんにしてみました。

島田恵さんの写真パネル(青森・六ヶ所村)で会場の雰囲気盛り上げ、まずビデオ上映。ところが、昨年 NHK で放映された『小さき人々(スベトラーナ・アレクシエービッチ)』と併せて上映する予定だったビデオの、編集担当者原さんが、なんと急病でダウン。5 月も終わりに近い頃、手付かずのビデオが事務所に戻ってきた。やっぱりハプニングはつきもの、途方に暮れかかったけれど、4月にジトミルを訪問した戸村さんが現地で見つかったビデオも“なかなかのもの”ということで、急きょ変更。すぐにそのビデオを手に入れる手はずを整え、はるばるジトミルよりビデオが到着したのが総会5日前。ぎりぎりのスケジュールでした。当のビデオは、今までは封印されていたと思われる事故直後の生々しい映像が盛り込まれた、一見の価値ありのものでした。

その後、懇親会へと移行し、コーヒーとケーキをほおぼりながら、臨床工学技師の北野達也さんの、今年2月の専門家派遣の報告会となりました。北野さんが現地で悪戦苦闘している姿が、スライドを通してよく伝わってきて、心打たれました。その後、出席され



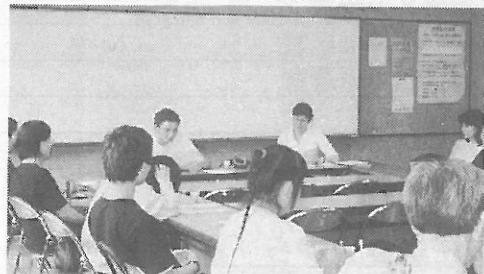
た皆さんから、北野さんの仕事の感想や、チェルQへの熱い想いを聞かせていただくこととなり、チェルQはこういう方たちに支えられ、一堂に会す意義を、強く感じました。皆さん、来年もぜひ来てください。できればチェルQデーのご要望などもお聞かせください。待ってます！ (市原)

異色のウクライナ講座!?

6月16日(土)名古屋女性会館において、第3回ウクライナ講座「アネクドート(ウクライナの小噺)」が開催されました。講師のアンドレイさんは100近いアネクドートを用意してくれました。その中の2つをご紹介します。

「ウクライナ人の大好物といえば、豚の脂身の塩漬け(サーロ)。ウクライナのグリヴナ札には、歴史的な人物の顔が書いてある。そこで問題。グリヴナ札のにせものと本物をどうやって見分ければいいのか? まず紙の真ん中にグリヴナ札を置く。そして塩漬けの脂身を札のまわりにそってゆっくり移動させる。グリヴナ札の歴史的な人物の視線が脂身のかたまりを追うのなら、このグリヴナ札は本物だ」

「お嬢様がガウンを羽織るとすぐに、男性の召使が部屋に入ってきた。『ルイ、どうして突然部屋の中に入るの? 裸だったかもしれないのよ』
『ご心配ありません。お嬢様のお部屋に入る前に、かならず鍵穴から様子をうかがいます』」



いかがですか? ちょっと危なげなアネクドートは、一味違った講座に、ちょっと戸惑われた参加者もいらっしやっただと思いますが、おおむね(?)好評でした。

さて、第4回のウクライナ講座は、8月18日(土)午後1時30分より、伏見ライフプラザで、「ウクライナのいまどきの若者事情」と題して、現役女子大生マリア・イワフネンコさん(名古屋大学留学生)を講師として招き、ウクライナの若者の生活、遊び、恋愛事情まで、楽しく語っていただきます。

(市原)

はばたけピーサンキ!!

2月の第1回ウクライナ講座で取り上げてもらったピーサンキが、「とどけ鳥のたまごトポリ(わた毛をとばす木の名前?)」として大須の休日にお目見えして3ヵ月。皆様のご好意により、7月からは結婚式場ルブラ王山(名古屋市千種区)で引き出物の一つの提案として、スリランカの塩と共に、ショーケースに置いていただけることとなりました。すぐに声



がかかることはないでしょうが、トポリを見ていただくことにより、これから結婚して新しい命を生み出す人たちに、大切な子どもを健やかに育てるための環境についての問いかけになればと、内心期待しています。また、トポリが知られることでミルクキャンペーンの輪がより広がって、トポリの役割がはたせることでしょう。結婚の予定のある方は、ぜひルブラ王山をのぞいてみてください。

(榎本恭子)

スタディ・ツアー<9.18~9.28>申し込み状況

7月20日現在のスタディ・ツアーの申し込み人数は11名。目標の15名を下回っており、スタッフ一同焦りを感じております。このポーシェが皆様のお手元に届く頃も、まだ申し込みを受け付けているかもしれません。参加を迷っている方! ご一報ください!! (かよ)

うれしい誤算…2001年度のボラ貯交付金

4, 148千円に決定!!

「低金利で、きびしい審査」という状況の中、今年のボランティア貯金交付金の額が4,148千円に決定しました。新年度の予算には、2,500千円程度と見込んでいただけに、うれしい誤算となりました。これは、私たちの「11年間とぎれなかった活動実績」と「状況の変化に即応した効果的な支援内容」が評価されたのだと考えます。今後とも皆様のご支援をお願いします。(J)
<交付金の決定額>

支援項目	自己資金(千円)	交付金(千円)	合計(千円)
医療機器メンテナンス費	600	1,200	1,800
医療機器物資輸送費	355	0	355
日本人専門家派遣費	165	300	465
医薬品購入費	500	2,000	2,500
医療機器購入費	162	648	810
合計	1,782	4,148	5,930

「移住基金」から「救援基金」へ

1990年チェルノブイリ救援・中部創立以来、私たちの活動を現地ですべて支えてくれている「移住基金」が変わろうとしている。原因は、独立ウクライナの法律がころころ変わり、これまでの「移住基金」のままでは活動が困難になったからである。

そもそも、この困難の始まりはウクライナ政府が私たちの救援物資や救援金に20%の税金をかける、という決定を4年前にしたことに始まる。世界中の救援団体から非難を浴びた法律だが、とにかく成立してしまった。海外からたくさんくるチェルノブイリ救援金や物資に目をつけたあくどい法律である。救援に名を借りた闇物資流入を防ぐ、というのがその理由である。内閣直属の「救援委員会」の審査をパスした場合に限り無税となった。この委員会はウクライナ国内に送られてくるすべての救援物資や救援金について海外団体と現地団体に前もって書類提出を求め、毎月2回まとめて審査が行われる。それをパスして初めてお金と物資を送ることができるのである。そんなわけで、救援物資ひとつ送るにも面倒な書類を私たちも、また移住基金も毎回書いている。

ところが今年1月また法律の改定があり、援助先が政府機関(国立・州立)に属する病院や教会以外の団体である場合は、救援委員会の審査を通った場合でも、すべて一律に20%の所得税を取るという。これでは事故処理作業協会や障害者協会など民間団体の援助はできなくなる。その解決策のひとつが、「移住基金」自身が「救援基金」という名前の純粋な被災者援助組織になることらしい。「純粋な被災者援助組織」というのは今一つわかりにくい、要するに政府にさまざまな要求をしたり、キャンペーン活動などは制限され、国内外からの救援物資受け入れ団体に徹する、ということらしい。これが認可されれば「救援基金」自体が外貨受け入れ可能になる。もちろん内閣の「救援委員会」の審査は必要だが、とりあえず私たちの活動は従来どおり継続できることになる。

独立はしたものの経済危機が深刻で、おまけに政治家のスキャンダルが続いているウクライナでは、とにかく庶民から取れるものはどこからでも税金をとる、ということしか出来ないらしい。税金が高いので、多くの商店や企業は脱税が当たり前、力づくで税金をとられる年金生活者や公務員、私たちのような海外団体などが真っ先にとぼちちりを受けることになる。奨学金にももちろん20%の税金がかかっている。(河田)

愛知県国際交流協会に30万円を申請!

昨年は、ジトームル州立小児病院から要請のあった、「保育器」購入費を申請し、26万円の交付金を受ける事ができました。贈られた保育器は、現在州立小児病院のNICU（新生児集中治療室）で活躍しています。

今年も私達は、「愛知県国際交流協会・国際貢献支援事業助成金」の申請をしました。

今年の対象となる事業は、『事故処理作業協会』『障害者協会』などに、車椅子20台を贈呈する。』です。

救援・中部は、1995年に発足してから今までに、ジトームル州内の病院などへ89台の車椅子を贈ってきました。しかし、原発事故の処理作業に携わって被曝し、障害者となった方たちだけでなく、幼少に被曝した子ども達が成人し、新たな障害を持った子どもの両親となるなど、車椅子を必要とする人の割合が、年々増加しています。そこで、今年の新事業を、『車椅子購入費90万円と輸送費30万円の総額120万円』としました。助成金申請額は購入費の3分の1以内の30万円とのこと。

この夏は【車椅子キャンペーン】を企画し、車椅子20台（90万円）購入のご協力をお願いします。合わせて医療施設・医療機器メーカー・福祉機器メーカーなどへも、中古やサンプルの提供を働きかけていきます。

車椅子キャンペーン

2001年夏 活動開始!

この夏は【車椅子キャンペーン】を行います!

発足から現在まで救援・中部は、皆様からの寄附金や、医療機器メーカー・福祉機器メーカー・医療施設からの協力で、主にジトームル州内の医療施設へ89台の車椅子を贈ってきました。

各病院院長からの要望書が届けられたり、個人からの手紙もありましたが、何よりも移住基金による各医療機関の調査報告と、医療機関からの要請があったからでした。

しかし、わずかな障害者年金を受けている生活者は、入院治療費など手元にありません。家庭生活を送る障害者にこそ車椅子が必要なのに、ほとんど贈ることができませんでした。

今回、移住基金を通して「事故処理作業協会」や「障害者協会」に車椅子を贈ります。彼らの中から、車椅子によって新しい可能性を見つけ、自立への一歩としてもらいたいです。寝たきりの方が、ベッドから離れ、家族と一緒に隣の部屋のテーブルで食事をしてもらうために!

ぜひ皆様も、車椅子20台（90万円）の一部を担ってください。



夏だ！ 海だ！ でもひたすら討議・議論・話し合い…

6月30日と7月1日の1泊2日で、知多半島的美浜で運営委員を中心に12名が合宿をしました。月1回の運営委員会では十分な議論ができない大きな問題について、たつぷりと議論し、実りのある成果を挙げることができました。



議論されたテーマは、①財務の現状、②活動の総括と現状、③今後の方向性、④業務分担の再検討、⑤1千万円プロジェクトの5つでした。

①については、寄付金、助成金ともに漸減傾向にあることを踏まえて、現物による寄付(一定の基準で貨幣換算する)を含めて、直接事業費を年額1500万円以上確保することを今後の活動のガイドラインにすべきであるとの提案がありました。

②については、支援者、スタッフ、現地パートナー(移住基金)の信頼を得られる活動を積み重ねたことが、11年間継続できた理由であること。しかし現在はチェル救の曲がり角であり、問題は、メンバーの固定化・高齢化、国内活動(各種催しや街頭カンパ活動など)の不活発、事務作業の増加、支援事業の固定化などです。

③については、自立支援の事業に力点を移すこと。医療支援については、今後は高額医療機器は原則として提供しないこと。医療機器に関しては、補修とメンテナンスを中心とすることで一致しました。この件は、7月の運営委員会で正式に確認されました。

④については、事務局が受け持つ業務を軽減すること、ボラ貯と外務省補助金の申請/報告業務を計画的、組織的に行うことが提案されました。

⑤については、新しい着想の事業であること、自立に貢献すること、支援者の理解が得やすいことなどから、「デニシサナトリウムの食料自給プロジェクト」に関心が集まりました。このプロジェクトは、チェルノブイリ事故被災者が利用するデニシサナトリウムが、利用者用の食料(当面は、鶏卵・鶏肉と野菜)を自給することで、利用料を引き下げ、被災者が利用しやすくするというものです。議論の中では、将来的にはバイオマスを利用したエネルギー自給も可能ではないかという意見も出ました。

5つのテーマを2時間ずつ話し合い、あいだに入った夕食も、なんとみんなビールコップ1杯だけ!(アルコール抜きとはならなかった、さすがに)。しかし夜9時過ぎ、予定通り議論は終了し、疲れを癒す温泉につかり、こんどは酒を酌み交わしながらの議論となりました。

翌日、正午に合宿を終えた後は、知多にある杉本美術館へと足を運び、頭を浄化させて、みな帰路に就きました。

今回の成功に気をよくして、来年もこの時期に合宿をすることになりました。参加してみたい方は事務局まで連絡してください。

(田中良明)

救援物資は今

ポレーシェ読者の皆さまは、救援・中部を紹介した『知ってください』というパンフレットをご覧になったことがありますか？

その中に、1990年4月発足からの活動を抜粋した、〈チェルノブイリ救援・中部のあゆみ〉が紹介されています。

この11年間に、「ミルクキャンペーン」や「いのちのゆりかごキャンペーン」などを行い、ご協力をお願いしてきました。そして、皆さまからの寄附金をもとに、

「外務省」や「ボランティア貯金」への交付金申請を行い、交付された資金で、現地の医療機関への医薬品・医療機器などを贈るといった支援も行ってきました。総額は、約2億円を超えています。一紙面を借りて、お礼を申し上げます。

昨年2月に、臨床工学技士：北野さんの協力により、医療機器のメンテナンスを行いました。そして、今までに現地へ贈った医療機器は、「年月を経ており、メンテナンスを必要としているが、またメンテナンスを行えば、再び医療現場で充分活躍できる。」と報告されました。

私達は、今後の活動について慎重に話し合い、「医療機器に関しては、新規購入を控え、現存する医療機器のメンテナンスを中心に活動を行う」ことにしました。そして、提供された医療機器が、どのような状態にあるかを総点検し、新たな活動の参考にしたいと考えました。そこで、活動を行うにあたり、これまでに提供した医療機器の利用状況に関するアンケートを実施する事にしました。

移住基金様

今後は、以前のように高額な医療機器を贈ることはできません。ですから、これまで贈った機器の修理を援助します。また、日本から修理済みの機器を贈ります。これは、今後の救援活動に対する、私たちの基本的な考え方です。私たちは、壊れたまま保管している医療機器の修理をするように、アドバイスし援助します。そのために、私たちが過去に贈った医療機器がうまく稼働しているかを調査するアンケートを送ります。各病院に配ってください。

〈アンケート〉

No.	貴施設に贈った医療機器名	贈呈年	稼働状態
1			
2			
3			

- A：稼働中（修理箇所あり・修理済み）
- B：故障中（いつから？ どこが？）
- C：廃棄（いつ？ なぜ？）
- D：修理して使用したい
- E：その他

ウクライナを旅して(1) 西へ

(リヴィウ、カムヤネツ・ポディルスキー)

戸村 京子

今回はプライベートな旅で、4月26日のチェルノブイリ15周年のセレモニーに出席し、移住基金との用事を済ませた後は、本当の個人的なひとり旅となった。

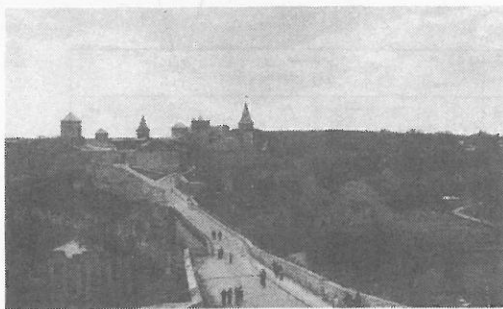


念願のリヴィウ、オデッサなどへ行ける喜びと、言葉の心配から大きな不安も秘めながらの旅だった。ジトーミルからリヴィウまで、車で西へ330キロ、ジトーミルの南西フメリニツキー州カムヤネツ・ポディルスキーまで230キロ、ジトーミルまで戻る230キロ、あわせて約800キロの長旅。

運転手付きの車の手配、ホテルの予約を、事前に日本から消防局のアントニョクさんにお願ひし、ヴァロージャ夫妻と一緒に付き合ってくれた。私はお近づきに持参した日本のど飴を勧めながら、おずおずとコミュニケーションを図る。するとまもなく心配は消え、イーラさんともあれこれ、たどたどしいウクライナ語、つたないロシア語でおしゃべり。男性との会話より、女性同士はなぜか、大体わかるのが不思議。というより、彼女がわかりやすいようにウクライナ語を通訳してくれるのだ。彼女も修学旅行?のようにはしゃいでいた。昼過ぎて、リヴィウに到着。街はウィーンの影響を受け、ヨーロッパの雰囲気を持つ落ち着いた街だった。旅行者も多く、私にはハイデルベルクを思い出させた。オペラ・バレエ劇場は、ここのもゴージャスだ。こじんまりした街の中を歩き、由緒有りそうな建物の中に入ると、壁には彫刻や絵が描かれた、落ち着いた喫茶店(右上の写真)。とろっとしたトルコ式コーヒーを飲む。ガイドの女性は、もちろんウクライナ語。リヴィウのウクライナ語はジトーミルとまた違った、美しい音楽的な響きで、なんだか人がみんなやさしく思えてしまう。

夜は、街外れのコテージに泊まる。そこのレストランで、いわゆるニューリッチたちがカップルで食事に来ていて、楽しそうに踊ったり、各テーブルとの歌の交流。オペラ、民族音楽が鳴り響き、しばしここがウクライナだったことを忘れる。

次の日、車はえんえんとステップを走る。北海道のような風景がどこまでも続く。そう、ウクライナは大穀倉地帯だ。数少ない山カルパチアを過ぎ、ここにも原発のあるフメリニツキーに入りカムヤネツ・ポディルスキーに着く。ここからも消防士達がチェルノブイリに駆けつけた。ここは、たぶん日本での紹介は初めてだと思う。11世紀から18世紀ごろ築かれた古城(砦…下の写真)が残っていて、「ほら、この塔はトルコ軍が破壊して作り直し、



こっちの丘からはポーランドが攻めてきて…」と説明してくれる。ウクライナの歴史は、北から南から、東から西、四方からの侵略の連続だったのだ。この古い断層と城壁の残る、今は素朴な静かな町で、幾組みかの結婚式の風景が平和に見られた。(次号に続く)

原子力に代表される超大型電源の時代が終わろうとしている。電気は使う場所で作る、コストさえ安ければこれが理想的である。送電ロスや立地の困難もない。そうした技術の最先端にいるのが、「燃料電池」と呼ばれるシステムである。いささか聞きなれない言葉かもしれないが、近年にわかには脚光を浴びている。理由の第一は、その装置の単純さとエネルギー効率の良さ、廃棄物発生量の少なさである。ちなみに原発は、巨大な設備の割にはエネルギー効率が悪く、核分裂エネルギーの30%しか電気にならず、残り70%は海に捨てている。もちろん核廃棄物は手に負えない。火力発電は、半分以上のエネルギーで海を温めている。炭酸ガスは、地球温暖化の元凶である。送電ロスも考えれば、これらの発電システムのエネルギー利用効率は、20~30%に過ぎない。これに反して、燃料電池は、発生するエネルギーの70~80%が利用可能である。

ところで、燃料電池とは何か？ 中学校か高校で水の電気分解の実験をやったことのある人は分かるだろう。水(H₂O)は、食塩などの電解質を溶かす。これに直流電気を流せば、水素と酸素に分解する。燃料電池はこの逆を行う。水素と酸素を混ぜ、触媒を使って化学反応を起こし、水を作ればついでに電気が発生する。廃棄物は水である。電気の発生量は、反応エネルギーの30~40%だが、一緒に出る熱まで利用すれば、トータルでは70~80%のエネルギーが使える。装置は極めて簡単で小型であり、機械部分がないので、騒音・振動もない。2~3年以内には、家庭用の燃料電池が売り出されよう。電気と冷暖房をいっしょに行う。世界中の自動車メーカーが、車載用燃料電池の開発にしのぎを削っている。実用化は目前である。

問題は、燃料である。酸素は空気をそのまま使える。水素はどうするか？ 日本やアメリカの自動車メーカーが目指している「石油から水素をとる」方式は、愚の骨頂である。燃料効率は上がるものの、発生する炭酸ガスは火力発電と変わらない。資源がいずれは枯渇する。環境と将来を考えれば、EU諸国が目指している「メタノール方式」が優れている。何よりもこれは、化石燃料ではなく、天然有機物の醗酵で生まれる再生可能エネルギー、すなわちバイオガスから作れるからである。バイオガスは、し尿や生ごみからでも得られる。食品工場の廃棄物などによる燃料電池は、すでに稼動中である。家畜の糞尿も有望、生物由来のものなら何でも利用可能である。そう考えると、資源は膨大な量に上り、かつ枯渇の心配がない。もとは植物である。植物は、太陽の光エネルギーを使って水を分解し、水素と酸素を取り出して炭酸ガスと化合させ有機物を作っている。植物は、電気を使わずに水の中の水素エネルギーを取り出す、巧みなエネルギー発生装置である。その触媒の葉緑体は、不思議にも燃料電池そっくりの構造をしている。

(河田昌東)

竹内さんのウクライナ便り

(キエフ駐在 竹内高明)

- ・ 2001年6月のインフレ率は0.6%、2001年前半期のそれは5.3%（昨年同期は18.7%）。1999年の年間インフレ率は19.2%、2000年には25.8%であった。
（政府統計委員会発表）（『日々新聞』7月5日号）
- ・ 2001年5月の平均貸金額は302.96グリヴナ（約55ドル）、4月のそれに比し4.9%増加。一方、すべての経済分野における未払い賃金の総額は、約45億グリヴナ。
（同上）

7月7日～8日はポルタヴァ州のコヴァレフスカヤ氏のダーチャ（キエフから車で3時間弱）に行き1泊してきました。10年ほど前、氏が入手し（周辺に工場もなく放射性物質による汚染もない、ロシア語でいうところの「生物学的にきれいな」地域にある）、以後御夫君と共に営々と手をかけ整備してきた自慢のダーチャで、以前から一緒に行こうと誘われていたのを逃げ続けていたのですが、ついに断れなくなり行ってきたわけです。ダーチャは農村のはずれにあり、かなりの広さの野菜畑と庭（果樹と花が植えられている）を備えたものです。村はウクライナの一般の農村と同じく貧困の瀬戸際にあり、ほとんど自給経済ということですが、上記の「きれいな」区域にあるため、キエフ住民のダーチャが20ばかりあるそうです。確かに空気はよく、玄関前のひさしの下で椅子にかけていると風は涼しく、隣家とのさかいに植えられた樹のこずえがざわめく音をきいているとまことにのどかですが、夏は農作業の忙しい時期で、コヴァレフスカヤ氏の二の腕は私のより太いのではないかと思います。夜は涼しく室内に蚊はおらず快適に眠れ、野菜のもろもろをお土産にいただいて帰りましたが、どうもこの「畏友」に四六時中お世話になるのは、私にとって完全なリラックスとはいえません。

現在ドル安・グリヴナ高の傾向があり、都心の両替窓口で1ドル=5.36グリヴナ前後。（1グリヴナ=約23円）キュウリ1kg=1.5グリヴナ、トマト1kg=3～4グリヴナ、米1kg=2.5グリヴナ、ビール500cc1瓶=1.5～2.0グリヴナ、リプトンのリーフティー100gが3.5グリヴナ、ガソリン1リットルが2グリヴナ弱といった物価ですが、乳製品や肉製品はずっと高いのですが、私は買わないのでよくわかりません。ベトナム製の25グリヴナの運動靴をはいていたら半年で穴があいてしまったので、安くてまともそうな革靴を店で捜してやっとみつけたのが172グリヴナ（高いのは400グリヴナとか600グリヴナとか）でした。

キエフでは相変わらず日中30度を超える暑さです。日本では参院選がかまびすしいことと思いますが、私はすでに「在外投票」をすませました。皆様お体お大事に。
（7月20日）

第13回 愛知サマーセミナー

『まちが学校になる』に参加しました

講座「チェルノブイリ原発事故被災者の救援」

戸村京子

今年のサマーセミナーは、7月20日～23日、名古屋千種区の相山女学園を会場に、900講座が開かれました。参加者ゼロのところもある？とのうわさもありましたが、10名ほどの受講者が得られ、午後1時から3時まで、夏休みに入ったばかりの5階の教室で話しました。

チェルノブイリ原発事故のこと、被災地や人々の様子、救援活動を、写真パネルを見てもらいながら話し、また、東海村の事故など日本の現状、これからのエネルギー問題を皆で一緒に考えてもらうよう、問題を投げかけました。チェルノブイリ事故が起きた1986年当時、まだ1歳ぐらいだった高校生の彼らにとって、チェルノブイリは地理的にも、時間的にも遠いテーマだったにもかかわらず、熱心に聞いて、次のような感想を書いてくれました。

「自分たちがチェルノブイリの人たちに比べたら、どれだけ充実した日々を過ごしていたかと、抑えきれない思いがこみ上げてきました…」(高1 山崎君)

「…生まれてくる赤ちゃんが未熟児だったり、何の罪も無い子どもにも影響してしまうのはいけないことだと思う。人が快適さを求めるとその分、バランスが崩れたりしてしまう。これからは今まで崩れてきた分を、少しずつ直していく努力をしないとイケない。自分たちはいいや、次の世代の人がやってくれる、と思っているうちは、無理なことになってしまうから、一人ひとりが意識していかなきゃいけないことだと思う」(高1 鈴木さん)

事務局だより

このところ猛暑が続いている。急に暑くなった日、まだ「梅雨」としか考えられなかった私の頭はこの変化が理解できず、「この熱さはおかしい。今日は熱があるのかしら」と思っていた。笑止ものだ。そんなある日、事務所のパソコンもこの暑さでご乱心状態になってしまい、使用できなくなった。冷房のない事務所はパソコンにも過酷らしい。河田事務局長が悪戦苦闘し、やっと使えるようになったが、まだまだ油断はできないというところだ。

話は変わるが、先日、代表が変わることに伴う手続きのため、法務局に行ってきた。前の代表の田中さんが予め法務局に電話をし、周到に準備してくれたので、必要書類を揃え届けるだけで済むと思っていた。しかし、結局4回も足を運ぶことになってしまった。揃えた書類に不備はないかなどをチェックし円滑に手続きができるようにするはずの「相談窓口」のサービスが、相談員によって言うことが違うため、混乱と無駄足を運ぶもとになってしまった。NPO 法人の登記関連の対応については、職員もよく理解していないようで、マニュアルが整備されていないとしか思えない。最終的には法人課の窓口に行ったのだが、そこも「相談窓口」と言うことが違っていった。ウクライナの役所はひどいと思っていたが、案外日本も変わらないかもしれない。電話でもけんか、窓口でもけんか。そんなこんなで、この猛暑の中、事務局員約1名、コンピュータと共に少々バテ気味である。(山盛)

読者のたより

・私は阪神大震災を経験しました。ドシンと音がして目が覚めました。真っ先に母の部屋にいくと、母は私の本棚とたくさんの本の下になっていましたが、けがはありませんでした。5階建ての公団住宅でしたが水漏れなどはなく、震源から遠かったのが幸運なことでした。父の住んでいた一戸建ても壁に亀裂が入り、隣家のブロック塀がぐらぐらの状態になりました。しかし父もけがはなく、炊き出しやテント生活をする必要もありませんでした。私たちは地震保険に入っていましたが、家の修理代は保険の額を超えていました。

電車に乗って三ノ宮の町に出かけてみると、神戸の繁華街はビルがばたばた倒れていて、その様子はこの世の終わりのようで、見物に来る人がいるのも無理はないと思いました。

阪神大震災から6年経ちました。年を経るごとに地震の記憶は薄れていきます。チェルノブイリの人たちは、放射能の半減期が何年であるのか知っているのでしょうか。国が経済不調なことも正しく発表されるのでしょうか。チェルノブイリの人たちは現状をどう思っているのでしょうか。たとえ少なくとも、できれば二世帯、三世帯と日本からの援助を続けていくことが必要だと思います。私の叔父は軍隊にいた頃、広島の方に処理に行きましたが証明ができず、被曝証明をもらえませんでした。医者にかかり、あちこち具合が悪いのに負担は一般の患者さんと同じです。原爆が落ちてからもう何年になるのでしょうか。

チェルノブイリ救援・中部の活躍はポーシェを見せていただいています。神戸からウクライナの人たちを見つめているものもいることとお知らせするとともに、皆さんのいっそうのご活躍をお祈りしています。
(神戸市 Fさん)

・ポーシェをずっと読ませてください。チェルノブイリ救援・中部がんばれ!

(大阪府 M・Tさん)

・近くに住んでいたら様々な催し物に参加できるのにと残念でなりません。ウクライナ語・ロシア語のクリスマスカードの書き方を通信にのせてもらえませんか?

(宮城県 K・Oさん)

→次号ではぜひ掲載したいと思います。名古屋見物を兼ねて遊びに来てくれるのをお待ちしております。
(編集子より)

編集後記

☆人間、違うっておもしろい。でもぶつかりあった時の折り合いのつけ方は? どこまで互いを認め合い、譲り合えるのか? さらに国際間になったら? 今の私のテーマだ。(京)

☆家の中では常にペットの如く、扇風機をお供させている。そこで、家電メーカーに私は強く提案したい、キャスター付き軽量コードレス扇風機の製造を。(佳)

☆この事務所は、とにかく暑い。普段の事務局員の苦労が、身にしみてわかる。

「クーラーを使う人は、原発を認めなくっちゃね。」と誰かが言う。しかし、これは二者択一の問題じゃあない。原発推進者は、いつも問題をすり替えて脅迫するから、気をつけようね。(J)

☆聞いてよ! パソコンのご機嫌が悪いのよ…入力して原稿を確認しているうちに、ちゃっかりフリーズしてるのよ。何度同じ入力をしたと思う? Ca不足のせい? 違うよね? (美)